北海道の学校図書館

発　行　北海道学校図書館協会
会　長　佐藤　正行
事務局長　新津　智哉
http://sla.gr.jp/~hokkaido-sla/
印刷所　㈱有伸商会
ＴＥＬ（011）814-6211

令和4年度　青少年読書感想文全道コンクール　入賞者決定!!

今年も全道から、たくさんの素晴らしい作品が集まりました。第１次、第２次審査を経て、入賞者が決定しました。12月４日㈰に晴れの表彰式が行われます。入賞者の皆さん、おめでとうございます。

第68回　青少年読書感想文全道コンクール
第48回　北海道指定図書読書感想文コンクール　特別賞入賞者一覧

北海道知事賞	＊和菓子の世界、いとをかし	帯広市大正小	３年	久保　咲楽
	＊協和音	旭川市春光台中	３年	半澤　真菜
	＊イマジン？	士別翔雲高	３年	竹内友羽愛
北海道議会議長賞	＊おおきな木	室蘭市旭ヶ丘小	２年	黒田　龍平
	＊未来への一歩	旭川市神楽小	４年	柚木　紗南
	＊ふうちゃんの声が聞こえる	札幌市伏見小	６年	前田　海音
	＊北斎が呼びかけている	北嶺中	３年	前田　海杜
	＊その扉をたたく音を読んで	札幌光星高	２年	野崎　幸子
北海道教育委員会教育長賞	＊つながるよ、私の世界とみんなの世界	苫小牧市拓勇小	２年	京極　莉空
	・母の涙とピリカの強さと、ぼくの決意	森町森小	３年	今井玲一朗
	・「わたしが障害者じゃなくなる日」を読んで	帯広市緑丘小	５年	小林　朱莉
	・兎の眼に映るタカラモノ	札幌市向陵中	２年	岩永千結子
	・目覚め	遺愛女子高	１年	山本　好花
北海道学校図書館協会長賞	・わたしの大すきなばあば	名寄市名寄南小	２年	松前ひかり
	・サムの勇気を見習って	帯広市帯広小	４年	須田　陽愛
	＊未来の希望を繋ぐ命のバトン	小樽市稲穂小	６年	塚原　大海
	・失敗は成長のもと	遺愛女子中	２年	井上　さや
	・私のオリジナル人生	遺愛女子高	１年	関根　凛咲
毎日新聞社賞	・「おねえちゃんずるいよ」を読んで	旭川市北鎮小	２年	白幡　莉子
	・ため息とのつきあい方	小樽市山の手小	４年	佐々木結望
	・いのちのバトン	札幌市伏見小	６年	前田　海音
	・バージョンアップ	苫小牧市明野中	１年	石村　紗羅
	・「本当の自分」はどこにいる	鹿追高	３年	類家　みう
北海道読書推進運動協議会長賞	・ぼくがえがおをとどけるよ	旭川市神居東小	２年	青木　孝慈
	・童話森の夜	函館市亀田中	１年	權藤　和奏
	・大切な人の52ヘルツを聞き逃さないために	遺愛女子高	１年	渡邉　杏音
北海道青少年育成協会長賞	・支え合う仲間の大切さ	音更町音更小	６年	佐野　文香
	・本当の家族とは	室蘭市東明中	３年	長井　悠
北海道ＰＴＡ連合会長賞	・差別をなくすために	室蘭市海陽小	６年	今野　幸音
北海道高等学校ＰＴＡ連合会長賞	・価値あるもの	帯広緑陽高	３年	南　愛乃
北海道教育振興会長賞	・「ばあばにえがおをとどけてあげる」を読んで	小樽市山の手小	２年	内海陽南子
	・「わたしは小さなエコフェミニスト」	教育大附属旭川小	３年	茂田さくら
	・私が弱虫を卒業するとき	札幌市本通小	６年	齋藤あさひ
	・意思の力という魔法	釧路市阿寒中	２年	松本　七虹
	・今日を生きる	士別翔雲高	３年	藤田　千草
北海道教育文化協会賞	・「博士の愛した数式」を読んで	岩見沢市豊中	２年	大森　花音
	・「線は、僕を描く」が教えてくれたこと	旭川実業高	１年	得能　夕月
はるにれ賞	・「未来へのアクション」	札幌市簾舞小	４年	バーンアルバ優花
教育出版社賞	・希望をつないで	苫小牧市日新小	６年	岡崎　聖朋
文研出版社賞	・いのちへのおまいり	安平町追分小	１年	本多　恵昭
北海道図書教材協会賞	・『このあと　どうしちゃおう』を読んで	函館市港小	４年	小林　京
図書館ネットワーク賞	・ためいきは前向きスイッチ	札幌市東園小	４年	佐藤　日和
北海教育評論社賞	・「友だち」を深める「三つ」のこと	室蘭市蘭北小	６年	佐藤　晴乃
光陽社賞	・「すごいね！みんなの通学路」	函館市北美原小	２年	高野　里桜
光村図書出版社賞	・「この本に出会って」	函館市北美原小	４年	中川　育磨
学校賞	小学校の部	**小樽市立山の手小学校**		
	中学校の部	**遺愛女子中学校**		
	高等学校の部	**北海道士別翔雲高等学校**		

＊は、全国コンクール応募作品です。（各部から代表～自由１点・課題１点）

北海道知事賞

和菓子の世界、いとをかし

帯広市立大正小学校　三年　久　保　咲　楽

真っ白な背表紙に書かれた「和菓子のほん」と言う文字と、あわいむらさき色の丸くて小さな花。そのかわいらしさに吸いよせられるように私はこの本を手にとった。

「これが和菓子なの？」

今まで私が食べてきた和菓子といえば、どらやきやお団子など、美味しいけれども見た目はひかえめなものが多かったので、背表紙の美しい花が和菓子だとはそうぞうも出来なかった。

本の中に登場する和菓子たちは、四季おりおりの日本のゆたかな自ぜんを表げんした美しい宝石のようだ。同じようなお菓子でも季節によって色合いやテーマが変わり、それにぴったりなロマンティックな名前がついている。そんなお菓子たちを見ていると、私の中には次々とたくさんの思い出がうかんできた。

たとえば「みのりの秋」というクリの形のお菓子を見ると、家族でクリ拾いに行った時に見た、ハリネズミみたいないがから顔を出すツヤツヤ光るクリの実を思い出すし、「草ぼたる」というお菓子を見ると、小川のそばの草かげで友だちがつかまえて見せてくれた黒くて小さなホタルを思い出す。

和菓子には、手にとった人それぞれのなつかしい記おくや、大切な人とすごした楽しい思い出、大好きな風けいをよび起こすまほうがかかっているようだ。そう思った私は自分でも和菓子を作ってみたいと思うようになった。

はじめは、きれいな花の形の「ねりきり」を作りたいと思ったが、それには先の細い特別なハサミや三角べらという見た事のない道具がひつようと書かれていたので、母と相談して図書館でかりた本の中から「えだ豆あんのくずまんじゅう」を作る事にきめた。

あん作りは大変な手間だったし、水でぬらした手の上で熱いくずであんをつつむ作ぎょうはなかなかコツがつかめず、悪戦苦闘した。苦ろうのすえに出来上がった和菓子に、えだ豆あんの緑を夏草に、すき通ったくずを川の水に見立てて「涼草」と名前をつけて、家族や友だちにふるまった。実さいに作ってみると、美しい和菓子はしょく人さんたちの高い技じゅつに支えられている事がよく分かる。

本を読む前は、クリームやフルーツではなやかにデコレーションされた洋菓子ばかりをかわいいと思っていたが、小さな和菓子の中にギュッとつめこまれた季節の物語や、しょく人さんたちの細やかな心づかい、高いぎじゅつに気づき、和菓子の世界はなんて美しく、おくがふかいのだろうと思った。

私の好きな清少納言の『枕草子』には「いとをかし」という言葉が出てくる。はじめは「お菓子のこと？」と思ったけれど「とてもおもむきがある」「とてもかわいらしい」という意味なのだそうだ。意味もひびきも和菓子にピッタリな言葉だと思う。

和菓子の世界、いとをかし。

和菓子の中に美しい日本をかんじた。

『和菓子のほん』
中山　圭子／文
阿部　真由美／絵
（福音館書店　2008.1刊）

北海道知事賞

協和音

旭川市立春光台中学校　三年　半　澤　真　菜

和音。三つ以上の音が同時に奏でられること。融合するかしないかで決まるが、その組み合わせは様々である。仮に二つの音の融合が確定していたとしても、あと一つの音を知識を得ず見つけ出すのは難しい事ではないだろうか。

その森は、地球上に数え切れないほどある。植物が豊かで動物が生き生きしているものから、魂が吸い取られたように殺風景なものまであるだろう。だが私たちはそんな多様を感じたり表現したりしている。それでいい。そうあるべきだ。何かにとらわれず、自分の想いを偽りなく自分で発信する。自分ではない誰かが手を加えたものは絶対と言っていい程自分の意ではない。自分で思ってもいないことを悪気はないとしても相手に染められ気が合うと思い込むのは相手にとってもいいことではないはずだ。反対に、自分から発信する者同士はいつでも偽りがないため、信頼し合えて安心できるだろう。その性格が自覚なしに森へ出てしまう。水質のようなものだ。似ている森へ足を踏み入れることができるのは安心できて心地良いのかはまだ分からない。

この物語は、オーケストラでヴァイオリンを弾く私にとって結びつく事が多かった。例えば、コンサートホールに足を踏み入れた時。時間が止まったような感覚で自分の部屋にいるよりも落ち着くが、舞台の上で演奏したり、観たり聴いたりすることができる場所であるため心踊るような幸せな気持ちになれる。もちろんヴァイオリンもだ。幼い頃から勉強することが好きであった私は一瞬も見逃さないというような気持ちでセミナーに参加して、もっとヴァイオリンを勉強したいという気持ちが強くなった。行動範囲を広げるのと比例して増えていく音楽仲間と過ごすのも楽しくて、音楽から離れることはできないと確信した。私もヴァイオリンを、音楽を食べて生きていきたい。ジュニアオーケストラを設立したい。そう思った頃から、気持ちが晴れてやる気に満ち始めたのだ。そして何でも楽しくなってきた。

私がこの物語で大切にしたい登場人物は和音だ。彼女は共にピアノを弾く天真爛漫な妹、由仁を支えるようにどこか自分を押し殺してまで由仁を愛してきたのだと思う。だが由仁が病気でピアノを弾けなくなってしまった時、和音はピアノのある部屋に頑として入らなくなる。今まで和音の唯一無二な大きい存在であった由仁と共に同じピアノを弾いてきたが、一人になって不安が和音に集中して、妹を優先してきた和音は、妹が弾けないのなら自分も弾かない、というところだろうか。そんな二人に再び黒い瞳に光が宿り、頬が紅潮するのは、お互いが居たからだ。和音のピアノを由仁が調律して不安を取り除き、由仁が調律したピアノを和音が弾いて二人で一つの音を奏でる。その未来予想図が二人を夢で溢れさせる。そんな支えが、夢が、本人や周囲の人を動かす力を持っていることを実感したことがある。それを手に入れた者はピストルが鳴ったようにそれに向かって走り出す。いつ転ぶのかなんて恐れず、見えてきた！なんて希望を持ちながら、一歩ずつ強くなっていく。そして観戦者を増やしながら。全力疾走中の和音に、結婚披露パーティーでピアノを頼まれる。その会場で荒れた森を整備し、歩きやすく、天気が曇り始めても晴れにしてくれる森の神とピアノを調律する調律師。ピアノを弾くピアニスト。ピアノを聴く聴衆。ピアノの上で三つが同時に融合して響くこと。和音。一つでも欠けると成立しない三つの関係は、お互いが心地良い距離であるのが条件だ。和音はこれからも、全力疾走を続けるだろうか。和音はゴールをもっとずっと遠くへ設置するかもしれない。そしてゴールが誰もいない森の中となった時、植物を生い茂らせ動物を笑わせ、何よりも和音自身が幸せで在れば、私も幸せである。ぜひ、三つの関係に入れてほしい。応援しています。私より。

私にとって三音の関係の一音は、今はお客様というより、家族や先生、友達など知り合いが多い。この音を世界中の発展途上国へ当てて、音楽に触れることでより毎日が楽しくなり、そのまちに音楽が溢れ、発展したり、治安が良くなったりして、生活しやすく、少しでも生きる活力になってほしい。これが私が望む音楽の在り方であり、正解ばかりを求めない、所属しているオーケストラの先生方を見て、後輩を指導して、感じたことだ。

だから私は、保護団体に入団したり、ジュニアオーケストラを設立したりして、自由で楽しい音楽を広めていきたい。この物語に、和音に、出会えて背中を優しく熱く押してくれた気がした。私も全力疾走しなければ。ゴールはどこになるのか、将又それは本当にあるのか。今、私の目の前の霧は晴れているからだ。心地良い和音を見つけよう。走って走って走り続けて泥まみれになりすり傷を負ってまでも助けた人や私はきっと、幸せだろう。

『羊と鋼の森』
宮下　奈都／著
（文藝春秋　2015.9刊）

北海道知事賞

イマジン？

北海道士別翔雲高等学校　三年　竹　内　友羽愛

「自分は将来どうなっているのだろう」
誰もが一度は考えたことがあると思う。私は今高校三年生、将来と向き合い、決めなければならない時期だ。考えるたびに、本当に今目指している世界でやっていけるのかという不安が募る。その時、高校一年生の時に読んだ「イマジン？」という本の存在を思い出した。進路に向けて深く考えるようになった今、あの頃とはもっと違う目線で考え、読むことができるのではないか。そして、私の悩んでいることを吹き飛ばしてくれるのではないかと予感した。そうして私は、本を開いた。

「イマジン？」という本は、ドラマや映画の制作を陰で支えている人々を描いた作品だ。そして主人公、良井良助は、幼少期に映画を見た時、物語と現実をつなげる作り手の存在に気がつき、自分もその作り手になりたいと考えるようになった。それから良助は専門学校へ進み、就職した。しかし上手くいかず、未練があるまま、惰性した毎日を過ごしていた。そんな時、知り合いから映像関係のバイトに無理やり駆り出される。良助は右も左も分からない映像の世界へ再び飛び込み、現場で経験を積んでいくうちに映像への情熱が戻ってくるのだ。

私は良助に親近感が湧いた。なぜなら私も、幼少期のころ、テレビで見た建築の番組に魅了され、その道に進みたいと考えるようになっていた。そして数ヵ月もすれば私は、専門学校に進み、就職する。図らずとも今、良助と同じ道を辿っていたのだ。しかしそれと同時に、一つの疑問が生まれる。なぜ良助は夢に向かって歩き出すことが怖くないのだろうかと。私は、歩き出すことに喜びを感じると同時に、恐ろしさを感じる。いつも、初めてのことに挑戦する時は、後悔しないように最善の選択をしなくてはならないと考えてしまうからだ。「後悔」という二文字は私にとって呪いの言葉だ。なぜなら後悔した自分を見るのが惨めでならないからだ。そのため、その言葉で、身動きが取れなくなってしまうことが何度もあった。けれど、そんな考えが一瞬で吹き飛んでしまうような言葉に出会った。「おら、走れ！新米なんざそれしか脳がねえんだから」
これは良助が、現場にいた社長にどやされるシーンでの言葉だ。私は雷が落ちたような衝撃を受けた。初めのうちはできることなんて限られている。おそらく、社長もそうだったのだろう。新米の頃は、がむしゃらに走って自分を確立していったのだ。私が今見ている大人だって、初めからできているわけじゃない。その過程で幾度も後悔することがあったと思う。後悔するのは当たり前。後悔するたび向き合って、それを何度も繰り返して、研ぎ澄まされ、自分にしかできない何かを生み出すことができているのだと気づいた。いつも私が見ていた景色にはそんな人たちの背景があったのだ。後悔したことは、忘れたくなる。おそらく、誰もがそう思うことだろう。しかし、後悔を後悔のままに終わらせてしまうのは勿体無いし、自分の自信を失うことにも繋がる。思考を止めずに、向き合うことが必要だったのだ。そうすることで、自分の夢にぐんと近づくことができる。そう思った時、今までの自分がとても小さく思えた。この言葉は、私の長い間あった「後悔」という言葉の解釈に大きな変化をもたらしたのだ。

そしてもう一つ私に変化をもたらした言葉がある。それは、この本の題名にもなっている「イマジン」という言葉だ。「イマジン」とは、想像することや考えるという意味があり、良助が気分屋の監督にコーヒーをかけられた時やチーフ助監督に目をつけられ理不尽に絡まれた時に出てきた言葉でもあった。そのとき、良助は持ち前の柔軟性と発想力を使いその場を切り抜けた。私は感心すると同時に尊敬をした。私なら、困惑して何も言えなくなってしまうからだ。しかし、「イマジン」を思い出し、切り抜ける力を身につけることで、自分に自信を持つことができ、人としての価値が上がる。自分に余裕ができると、他の人の手助けをすることもでき、今よりもっと成長することができる。「イマジン」というたった四文字で心のあり方が変化したのだ。

私は本を読む前、将来について考える時頭の中に霧がかかっているような感覚があった。けれど自分なりに納得のできる答えを見つけることができ、心の中は晴れていた。私は、これから建築の道に進み、今と全く違う世界へ足を踏み入れようとしている。そこでは、今までの考え方が通用しなかったり、理不尽なことに見舞われたりするかもしれない。しかしその立ち向かい方を学んだ。また見失っても、この本を読むことで自分の原点を思い出すことができる。そんな心の支えとなる本を見つけることができたのは私にとって幸運なことだと感じた。

『イマジン？』
有川　ひろ／著
（幻冬舎　2020.1刊）

北海道議会議長賞

おおきな木

室蘭市立旭ヶ丘小学校　二年　黒　田　龍　平

夏休みの中の三週間を北九州市のおじいちゃま（お母さんのお父さん）の家ですごした。おじいちゃまは会社が休みの日に、ぼくを近くの山や川に連れて行ってくれた。

「りゅうへい、あの大きな木を見てごらん。」ある朝、暗い森の山道を歩きながら、おじいちゃまは言った。ぼくはおじいちゃまの指さした方を見た。そこには、両手でかかえきれないような大きな木が立っていた。高さは大人のせたけより何倍もあって、どこがてっぺんだかわからない。枝は右へ、左へと広がり、みきの部分には緑色のコケがびっしりと生えていた。

「これはクスノキと言ってね、百年以上、この山で生きてきたんだ。おじいちゃまはこの木が大好きなんだ。死んだらこの木の中に入って、りゅうへいたちを見守っていきたいと思っている。」

「おじいちゃまは死んだら木になるの？」

「死んだら、どこにでもいけるし、何でもなれるんだよ。」

その日の夜、ねる前に、おじいちゃまは本だなから一冊の本を取り出して、ぽんとぼくに手わたした。みどり色のきれいな表紙の本だった。ふとんに入って本を開いた。

一本のリンゴの木と少年の物語だった。おもしろくてどんどん読んだ。リンゴの木がおじいちゃま、少年はぼくのようだと思った。

つぎの朝、おじいちゃまとまたあの山に登った。あの大きな木の前に来ると、おじいちゃまは言った。

「りゅうへい、人間というものはひとりでは生きていけないんだ。みんな、だれかに、何かに助けてもらって生きている。人間だけじゃない。生き物はみんなそうさ。」

大きな木がきのうとはちがって見えた。物語の少年のようにこの木と話ができるような気がした。友だちになれるかもしれないと思った。ぼくもこの木が好きになった。

急に風がふいて大きな木がサワサワゆれた。

『おおきな木』

シェル・シルヴァスタイン／作

村上　春樹／訳

（あすなろ書房　2010.9刊）

総　　評

審査委員長　北海道学校図書館協会監査　**矢田　春義**
（市立札幌新川高等学校校長）

本年度の第68回青少年読書感想文全道コンクール及び第48回北海道指定図書読書感想文コンクールには、646点の作品が寄せられました。各支部の厳正な審査を経た作品は秀作ぞろいで、若者だけでなく国民全体の読書離れ・活字離れが指摘されている昨今にあって、大変心強い気持ちにさせていただきました。コンクールに向けて一所懸命取り組んでくれた児童・生徒の皆さんはもとより、日頃から図書活動や読書感想文の推進に尽力されている先生方や、ご支援いただいている保護者の皆さんに敬意を表すとともに、感謝を申し上げたいと思います。

本コンクールの審査は、小学校低・中・高学年、中学校及び高等学校の５部門に分かれ、総勢21名の審査委員により厳正に行われました。審査を通して感じたことがいくつかあります。まず文章についてですが、豊富な語彙で巧みに表現した作品もあれば、平易な言葉を用い等身大の自分を素直に表現した作品もありました。そのどちらも自分本位に陥ることなく、読み手に伝えるために推敲を重ねた跡が伺え好感が持てました。構成については、起承転結を踏まえるなどしっかりと骨組みされていることに感心しました。中には冒頭に印象的な場面や言葉を置くことでドラマチックに仕上げた作品や、本のあらすじに自身の考え方が深化していく様子を織り交ぜて書き綴るなど、工夫を凝らした作品も見られました。また、内容については単なる感想や紹介に留まらず、本から学んだことや気づいたこと、自身と対峙し熟考したこと、社会について考察するなど、「読書を通して変容していく自分」を描いた読み応えのある作品が多かったと感じています。

審査を終えて、読書感想文には筆者のものの見方や考え方、洞察力、粘り強さ、創造力といった様々な力が内包されていると感じました。これらは日常の経験など豊かな学びから得られたものであり、全ての作品から子どもたちの充実した毎日が伝わってくるかのようでした。これからも、児童・生徒の皆さんが多くの素晴らしい本と出会い、自らの学びを深化させ、確かな成長につなげてくれることを祈念しています。

北海道議会議長賞

ふうちゃんの声が聞こえる

札幌市立伏見小学校　六年　前　田　海　音

「知らなくてはならないことを、知らないで過ごしてしまうような勇気のない人間に、わたしはなりたくありません。」

ふうちゃんの言葉が私の胸を打つ。今年、沖縄は本土復帰五十年を迎えた。しかし沖縄県民は過重な基地負担を今も強いられ、「沖縄を平和の島とする」目標は達成されていない。また、沖縄戦を体験した高齢者の四割がPTSDの可能性が高いという調査結果もある。心に与える傷は癒えておらず、いまだ戦争が終わったとは言えない現実がある。もっと沖縄を知らなければ、私達は前に進めないと思った。私はふうちゃんに導かれ、支えられながらこの本を読み終え、私もふうちゃんとともに「知る責任」を果たそう、と決めた。

ふうちゃんは私と同じ十二歳、天真爛漫でエネルギーにあふれている。家族で営む「てだのふあおきなわ亭」には、人間味あふれるお客さんが集い、笑いが絶えない。しかし、心の病を抱えるふうちゃんのお父さんをはじめ、それぞれが実は悲しみを抱えて生きている。けれど、その悲しみを無理に克服しようとせずに、ともに背負い、支え合って生きているように見えた。人の痛みに寄り添うことに及び腰な私に、ふうちゃんは語りかける。

「いい人というのは、自分のほかに、どれだけ、自分以外の人間が住んでいるかということで決まるのではないやろか。」

「肝苦りさ」という沖縄の言葉がある。この「あなたが悲しいと私も悲しい」という意味の言葉に出会い、私は、「自分の中に自分以外の人が住む」とは優しさや悲しさの一方通行ではなく、気持ちが通い合うことなのだと知った。ふうちゃんはお父さんの心の病の原因は戦争にあると考え、沖縄の歴史を調べることを決める。そして、母親は自分を捨てたと誤解しているキヨシ君にも、沖縄を知ろうと誘う。沖縄を知ることで、二人が分かり合えることを願ったのだ。ふうちゃんの決心に応えるように、梶山先生は本気で歴史を伝える教師を目指すようになり、「戦争を伝えるのはふうちゃんにはまだ残酷すぎる」と思っていたお店の常連ギッチョンチョンも、その考えを改める。キヨシ君は母親から愛されていることを知り、ふうちゃんを不良仲間から命懸けで守った。ふうちゃんの強さ、優しさが、頑なだった周りの人の心を動かした。ふうちゃんは、キヨシ君だけでなく、私やみんなの心臓も「足で蹴りよった」のだ。

この本に出会い、確かに私のなかに「ふうちゃん」が住み始めた。ふうちゃんも私も、脈々と続く生命のともしびのおすそわけで生きる「太陽の子」だ。今、平和のために私が出来る事は何か。事実を知り、戦争と自分との距離を縮めること。語り継ぐこと。そしてなにより大切なのは、身近な人をきちんと愛すること。それらは私達が果たさなくてはならない未来への責任だと思う。これからも私はふうちゃんとともに、歴史と未来の両方を見つめて歩いていきたい。

『太陽の子』
灰谷　健次郎／作
田畑　精一／絵
（理論社　1978.1刊）

2022年度（令和4年度）北海道の先生がおすすめする本

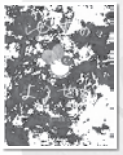
北海道指定図書

小学校低学年の部（1・2年）

さくららら
升井 純子／文 小寺 卓矢／写真
アリス館　1,540円（税込）
北国の桜の木は、じっくり開花の準備をします。自分の咲く日は自分できめる、さくらちゃんをまわりも温かく見守ります。

きたきつねとはるのいのち
手島 圭三郎／絵・文
絵本塾出版　1,870円（税込）
北海道の冬は、動物にとっても厳しい季節。やがて、春の陽射しに包まれて、きたきつねは、生きる幸せを感じるのです。

すみれちゃんと ようかいばあちゃん
最上 一平／作　種村 有希子／絵
新日本出版社　1,430円（税込）
山また山のその先に、ようかいばあちゃんはすんでいます。ひまごのすみれちゃんは、一人でおとまりするのですが…。



ゆきのようせい
松田 奈那子／作・絵　石黒 誠／監修
岩崎書店　1,540円（税込）
秋のおわり、雪虫はいきものたちに冬の訪れを知らせにゆきます。ある一匹の雪虫も、りすたちのところへ行きますが…。

中学校の部

みつばちと少年
村上 しいこ／著　高山裕子／絵
講談社　1,540円（税込）
北海道の大自然を舞台に、『みつばちマーヤの冒険』を愛読する少年と、様々な事情を抱えた子どもたちの交流を描く感動作！

マイブラザー
草野 たき／著
ポプラ社　1,650円（税込）
夢も友だちもなく、5歳児の弟の面倒を見る毎日。イクメン中学生・海斗の迷走と目覚めを描く、笑って泣ける成長小説。

小学校中学年の部（3・4年）

クマが出た！助けてベアドッグ
クマ対策犬のすごい能力
太田 京子／著
岩崎書店　1,430円（税込）
人も、クマも助けたい！人とクマ共存のために働く、職業犬、ベアドッグの活躍を描くノンフィクション。

きけんなゲーム
マロリー・ブラックマン／作
もりうち すみこ／訳　佐竹 美保／絵
文研出版　1,430円（税込）
病気のため、運動も旅行もできなかったサムが林間学校に行くことに。それは「きけんなゲーム」のはじまりだった…。

命を救う 心を救う
途上国医療に人生をかける小児外科医「ジャパンハート」吉岡秀人
ふじもと みさと／文　佼成出版社　1,650円（税込）
ミャンマーで貧しい人を無償で治療してきた医師の吉岡さん。その半生と忘れ難い日々を綴った児童書ノンフィクション。

小学校高学年の部（5・6年）

蛾（ガ） 姿はかわる
イザベル・トーマス／文　ダニエル・イグヌス／絵
青山 南／訳　化学同人　2,090円（税込）
うすい色の蛾と、こい色の蛾。産業革命の大気汚染を生きのびてきたオオシモフリエダシャクの、進化のおはなし。

天の台所
落合 由佳／著
講談社　1,540円（税込）
卵も割れない小6男子、がみババのもとで料理修業始めました！避けられない喪失との向き合い方を、料理を通じて描く力作。

五七五　ぼくのとなりはブラジル人
万乃華 れん／作　黒須 高嶺／絵
文研出版　1,540円（税込）
5年生の早川あさひは、ブラジルから来た日本語を話せない女の子ラウラと川柳をつくることに。困ったあさひはどうする？

北海道の本を読みましょう！

第68回 青少年読書感想文全道コンクール　第48回 北海道指定図書読書感想文コンクール

■主催／北海道学校図書館協会・毎日新聞社北海道支社
■後援／北海道・北海道議会・北海道教育委員会・公益財団法人北海道青少年育成協会　■選定協力／北海道読書推進運動協議会

感想文は夏休み明けに、学校に出してください。詳しくは、「応募のきまり」をご覧ください。　●ホームページ　北海道学校図書館協会　検索

優 秀 賞

小学校（低学年）の部（12名）

作品名	氏名	学校名	学年
せんそうのおそろしさ	柴田穏喜	北見市北小	２年
先生、感想文、書けました！	佐藤杏奈	室蘭市旭ヶ丘小	２年
天国へ行ったのりまき	大類悠月	室蘭市海陽小	２年
「いらないねこ」を読んで	馬狩玲	岩見沢市北村小	２年
「かっこわるい自分でも大じょうぶ」	田中沙緒梨	千歳市信濃小	２年
「わたしのすきなもの」	砂沢律	岩見沢市美園小	２年
数字でりょうりを見ると	佐々木英俊	札幌市厚別北小	２年
「ぼくの生きる力」	京極聖空	苫小牧市拓勇小	２年
わたしの元気のつたえかた	福田麻里	幕別町札内南小	２年
ばあばのためにできること	大坪葵	札幌市白楊小	２年
わたしとさくら	田中美帆	小樽市稲穂小	２年
わたしもようかいばあちゃんにあいたい	須田陽暖	帯広市帯広小	１年

小学校（中学年）の部（12名）

作品名	氏名	学校名	学年
さい高にうれしい夏	山田唯喜	苫小牧市明野小	３年
海からの願い	関姫花	苫小牧市ウトナイ小	４年
先生、宿題忘れてみます	成田幸太朗	岩見沢市栗沢小	４年
見つけたよ、お母さんのいいところ	髙桑叶真	函館市赤川小	４年
ためいきが教えてくれたにじのスタートライン	千秋杏寧	苫小牧市美園小	３年
いのちあるすべてのものへ	境波音	函館市赤川小	４年
魔法の数字が見えるまで	丸山紗由	北見市東小	４年
ちょっとむりしてみよう	田野紗彩	苫小牧市拓進小	４年
人をすくうということは	土田和奏	函館市港小	４年
「心をすくう」とは	波田ふみ	函館市北美原小	３年
「クマが出た！助けてベアドッグ」を読んで	木村咲結	函館市大森浜小	４年
心を救える医師になるには？～命を救う心を救うを読んで～	菅原愛花	旭川市啓明小	３年

小学校（高学年）の部（12名）

作品名	氏名	学校名	学年
Ｔ校バスケット部に学ぶチームワークの大切さ	佐藤美和	札幌市新光小	５年
長という役割	池田沙羅	せたな町北檜山小	６年
逆境を生かして	清水陽叶	音更町木野東小	５年
美しい音を求めて	村上佑	小樽市稲穂小	６年
捨てないパン屋と田村さんの強い心	川口乃々	旭川市北鎮小	５年
食べ物が教えてくれたこと	渋谷友理奈	幕別町札内南小	６年
私のしあわせのレシピ	小島愛奈	札幌市発寒南小	５年
しあわせのレシピを見つけるために	槙悠々乃	恵庭市和光小	６年
家族の笑顔を力に変えて	鈴木爽太	札幌市厚別北小	６年
「ふつう」の形	青山宰	室蘭市天神小	６年
環境への適応	猪口誠太	札幌市白楊小	５年
「天の台所」を読んで	大嶋宏晃	小樽市山の手小	６年

優　秀　賞

中学校の部（15名）

作　品　名	氏　名	学　校　名	学年
医師になる覚悟	坂本温音	札幌市信濃中	１年
言葉は偉大だ	塚本夏子	栗山町栗山中	３年
一期一会を大切に	髙橋姫菜	岩見沢市緑中	３年
これからの私	髙橋依莉	帯広市帯広第五中	３年
小説の力	眞木　泉	遺愛女子中	３年
人間にとって本当に必要なものとは	河内三咲	室蘭市港北中	２年
「私に届いたＳＯＳ」	河邉ゆう	遺愛女子中	１年
和さんから教えてもらった「私の生き方」	藤本有花	岩見沢市光陵中	２年
未来予想図	近藤芦羽	苫小牧市啓明中	１年
それぞれの見る世界	伊藤　福	上富良野町上富良野中	２年
自分が求めているその先へ行くには	横澤紗映	音更町共栄中	２年
家族って何だろう	福岡　唯	留萌市港南中	２年
リスタート	北村　絆	七飯町七飯中	２年
人生一度きり	岡川　悠	七飯町七飯中	２年
「回り道は無駄ではない」	原　あかり	室蘭市本室蘭中	１年

高等学校の部（８名）

作　品　名	氏　名	学　校　名	学年
泣くな研修医を読んで	谷口まる	聖心女子学院高	２年
見守る温かさ	西田文香	士別翔雲高	２年
不易と流行	伊藤ひばり	士別翔雲高	１年
選べなかった命	岡　優那	市立函館高	１年
現代日本の深刻な問題	浜谷内美心	函館白百合学園高	２年
「あい」から始まる日本語に触れて	中村みなみ	函館白百合学園高	２年
「時計じかけのオレンジ」を読んで	小林明衣	帯広南商業高	２年
私の扉が開く時	齊藤小桃	帯広柏葉高	２年

◆感想文集『北海道の読書』（令和４年度版）の普及を

第68回青少年読書感想文全道コンクール入賞作品集

○小学校版（1,000円）
　特別・優秀・優良　入賞者全作品を掲載
○中学校・高等学校版（1,000円）
　特別・優秀・優良　入賞者全作品を掲載

【申し込み・問い合わせ】
北海道学校図書館ＨＰ＞読書感想文コンクール＞北海道の読書＞学校宛・個人
札幌市立平岡小学校　教諭　佐藤秀則　ＦＡＸ　011－883－9419

■12月28日までに「北海道学校図書館協会文集会計」宛に、申込・送金をお願いします。
１月下旬にお届を予定しています。詳しくは、ホームページをご覧ください。
締切を過ぎての申込の場合、２月下旬のお届けとなります。

優 良 賞

小学校（低学年）の部

小樽市稲穂小	２年	伊藤　環
岩見沢市岩見沢小	１年	上原琥太朗
札幌市新川中央小	１年	山田　朝陽
釧路市昭和小	１年	藤井　凜音
室蘭市みなと小	２年	福田　結心
余市町大川小	２年	板垣　有咲
岩見沢市岩見沢小	１年	藤嶋　心也
小平町小平小	２年	小山　瑞綺
旭川市啓明小	２年	船谷　らな
留萌市留萌小	２年	米倉　旭飛
苫小牧市拓進小	１年	田野　栞絆
旭川市神楽小	１年	菊地　絵満
旭川市神楽小	２年	柚木晃太郎
函館市港小	２年	伊藤　冬麻
苫小牧市拓進小	１年	田野　心絆
室蘭市地球岬小	１年	古口　若菜
札幌市平岡公園小	１年	井川　眞宏
旭川市神楽小	１年	飛澤　心陽
室蘭市蘭北小	１年	石原　陽琉
室蘭市旭ヶ丘小	２年	篁　理帆

小学校（中学年）の部

室蘭市天神小	３年	福士　凛子
留萌市留萌小	４年	村上　創心
苫小牧市緑小	４年	梅田　七緒
札幌市北野台小	４年	森永萌々夏
函館市北美原小	３年	本田　結椛
新ひだか町高静小	４年	原　万琴
室蘭市旭ヶ丘小	３年	太田　悠翔
旭川市緑が丘小	４年	池内　咲心
教育大附属旭川小	４年	本間　明華
深川市深川小	４年	定岡　希扇
小樽市山の手小	４年	吉田小寿々
教育大附属函館小	４年	笠木　葵
七飯町七重小	４年	岡川　志穂
旭川市神楽小	３年	菊地　杏
室蘭市八丁平小	４年	岩村　遥仁
岩見沢市南小	３年	長江　理仁
室蘭市旭ヶ丘小	３年	梅川　壮介
旭川市向陵小	３年	千尋　玲奈
岩見沢市第一小	４年	作井　玲
札幌市桑園小	４年	木村　暉

小学校（高学年）の部

留萌市緑丘小	５年	久留宮　蓮
小樽市山の手小	６年	西野　結愛
函館市北美原小	５年	太田　樹
函館市北美原小	６年	有金　陽菜
函館市高丘小	６年	福嶋　杏梨
北見市中央小	６年	土田　小遥
札幌市桑園小	６年	杉田　知優
余市町黒川小	５年	大平　紘暉
北見市相内小	６年	原　みひろ
札幌市藻岩小	５年	門田　歩惟
札幌市大谷地小	５年	豊沢　峰々
小樽市稲穂小	６年	小泉　真歩
旭川市愛宕東小	６年	穴吹　瑠
平取町平取小	６年	村上　岬季
七飯町大中山小	５年	齋藤　薫
室蘭市天神小	６年	南川　安菜
旭川市春光小	６年	岡野　竜大
苫小牧市苫小牧東小	６年	髙橋　智哉
室蘭市蘭北小	５年	田邊ももこ
室蘭市八丁平小	６年	四方　奏

中学校の部

苫前町古丹別中	２年	明石　誠太
苫前町古丹別中	３年	池田　倖
藤女子中	２年	楠本　美那
美唄市美唄中	１年	山田　夏希
遺愛女子中	１年	黒田　結以
士別市士別南中	３年	藤田　康育
音更町下音更中	３年	宇野　仁海
岩見沢市清園中	３年	中山　優月
室蘭市港北中	３年	小松　望華
登別明日中等教育	２回生	林　眞加
室蘭市港北中	１年	工藤　維華
札幌市新川西中	２年	佐藤　奈央
帯広市川西中	３年	増地早佳江
小樽市松ヶ枝中	２年	岩松　莉香
苫小牧市青翔中	２年	櫻庭　彩夏
新得町新得中	１年	佐藤　瑠璃
士別市士別南中	３年	村井　莉緒
小樽市潮見台中	２年	小栗　聖名
遺愛女子中	１年	野口　桃佳
留萌市港南中	２年	高橋　夏織
遺愛女子中	３年	大北　弥生
室蘭市室蘭西中	２年	村上　心結
旭川市春光台中	３年	門井　さや
教育大附属旭川中	２年	荒谷　成美

高等学校の部

札幌光星高	１年	白石　胡実
室蘭清水丘高	３年	安藤　華凜
旭川実業高	１年	阿部　百音
旭川実業高	１年	山田　俊汰
旭川実業高	１年	内田　華央
士別翔雲高	３年	齊藤　成海
士別翔雲高	３年	加藤ななみ
士別翔雲高	３年	武山　知莉
滝川西高	１年	柴田皇々愛
遺愛女子高	１年	荒川　莉那
清水高	２年	清水　詩音
函館白百合学園高	１年	石塚和佳奈
帯広柏葉高	２年	古井凜々花

第43回全国学校図書館研究大会（オンライン大会）に参加して

多くの学びと業務に生かせるアイディア・知識を得て

北海道学校図書館協会　研究副部長　**浅　村　麻姫子**

（札幌市立稲積中学校・手稲中学校　学校司書）

昨年行われた全道学校図書館研究大会函館大会では、好きな時に好きな分科会に参加できるオンラインの良さを実感した。今回は全国大会。移動・滞在費用の心配なく参加することができた。会同での開催であれば、全国大会だからこその出会いがあり、それも得難い機会ではあるのだが、分科会の司会などの役割を引き受けていると本当は参加したい分科会があっても出来ないもどかしさを感じることもあった。今回はその心配もなく、参加したい分科会を視聴することができた。

現在の関心事は、やはり学校図書館のDX化。学校図書館の現状・これからの方向性・一人一台端末・著作権に関連するものを中心に10の講演・実践発表・講義等を視聴した。いくつか、特に印象に残った内容について述べると、まず挙げたいのは他の方も報告されている講演である。講演者に直接質問が可能な「柴田先生と語る会」にもzoomで参加し、さらに学びを深めることができたのも良かったと感じた。

講義「電子書籍と学校図書館」では、市教育委員会が学校用電子図書館を整備し市内の全小中学校が共同利用している栃木県矢板市の事例など、こうあってほしいという実例を知ることができた。講義「GIGAスクールと学校図書館」では、最新の著作権事情について学ぶことができた。「改正著作権法第35条運用指針」（2021版）及び特別活動追補版は、全学校図書館関係者が知るべき内容だと思う。校内で適切に情報提供するために、著作権について常に新しい情報を学ぶ大切さを再認識した。

全国大会への参加は４回目。今大会も、たくさんの学びと業務に生かせるアイディア・知識を得られた大会であった。後は、限られた勤務時間と仕事の優先順位の兼ね合いである。フルタイムとはならずともせめて１日６時間勤務・１校専任であれば…と思わずにはいられない。そんなことを思いつつも、来年の苫小牧大会、さらに次の全国大会はぜひ会同で開催され、多くの学びと参加される皆様との交流ができることを願うところである。

「第43回北海道こどもの本のつどい旭川大会」レポート

「仲間たちに、ようやく会えました！」

北海道子どもの本連絡会　事務局　沼　田　陽　子

角野栄子先生の講演会

2022年９月24・25日、「第43回北海道こどもの本のつどい旭川大会」を盛会のうちに終えることができました。新型コロナウィルス感染症予防のため、２年間見送り、感染症対策を講じたうえでの実施でした。

分科会は、子ども向けを含め７つのテーマで行いました。例年より短時間ではありましたが、どの分科会も参加者がコロナ禍での活動を含めたご自身それぞれの実践や感想、日頃の疑問や悩みなどを持ち寄り、講師を含めた活発なディスカッションが展開されました。久しぶりに対面で意見交換した参加者の充実した表情、熱気に溢れた会場の空気は「すべての子らに本の楽しさを」と願う、書き手・読み手・渡し手がつどい交流するスローガンを体現したものとなりました。

基調講演は、『魔女の宅急便』を代表作とする、角野栄子さんをお招きしました。いまや３世代にわたるファンに読みつがれている角野さん、赤いワンピースで颯爽と登場されました。小柄ながら存在感は圧倒的で明瞭な言葉で作品が生まれる背景を語ってくれました。

10歳で終戦を迎え、海外の文化が流れ込んできたときのカルチャーショックから、24歳でブラジルに渡り、生活したことが書く源になったとのことです。近著『イコ　トラベリング　1948－』（KADOKAWA）に詳しく書かれています。と茶目っ気たっぷりにご紹介くださいました。

これまで３年間、開催に向け丁寧に課題を解決していった現地実行委員会の細やかな配慮と北海道学校図書館協会様をはじめとする関係各位のみなさまの応援で実現できたものと感謝申し上げます。来年、第44回大会は札幌市にて開催予定です。基調講演は、絵本作家はたこうしろうさんをお招きします。ぜひ、みなさまご期待ください。

第６分科会
「クマと少年」からアイヌの文化を学ぶ
あべ弘士さん　川村久恵さん

第７分科会
堀川真さんと工作をつくろう

第４分科会
角野栄子さん作品鑑賞

支部だより●帯広支部●

帯広市支部は「帯広市学校公共図書館研究会」という名称で、帯広市図書館や帯広市内の学校図書に関わる各種組織と連携して活動を進めています。「事務局」「研究部」「コンクール部」の３つの部を組織し、学校図書館の活用や子どもたちの読書活動の推進を目指して活動しています。

今年度の主な活動としては次のようなものです。

○定期総会…研究会の役員ならびに帯広市内39校の図書担当者が集まり、５月に開催しています。今年度はオンライン開催となりました。

○学校図書館担当者実務者研修会…７月に帯広第一中学校で実施。図書貸出システム「LibMax」の利用方法や学校図書館の利用促進や活用方法の研修を行いました。

○学校図書館クリニック…７月に川西中学校で実施。帯広市図書館職員の方を講師に迎え、効果的な配架の工夫や蔵書管理、除籍の方法等について研修しました。

○帯広市読書感想文コンクール…夏休み前に募集案内、９月に審査。11月に帯広市図書館にて表彰式を行います。

帯広市内の各小中学校では図書担当が毎年変わることも多く、学校図書館の運営に不安をもつ教職員が少なくありません。そこで、図書に関する知識を得てもらうとともに、担当者同士の横のつながりを作ることで、学校図書館の活用が進むことを期待して研修などの活動を行っています。また、帯広市図書館との連携も重視しており、帯広市図書館の取組について意見交流を行ったり、事業の協力を行ったりすることもあります。

コロナ禍により生徒の交流を伴う活動が難しい状況が続いており、ここ数年は中止を余儀なくされていますが、各中学校の図書委員が集った「図書委員交流会」も事業の一つです。各校の図書委員会の活動を紹介しあったり、「ビブリオバトル」による交流をしたりすることで、読書の楽しさや本の魅力を再発見してもらう機会としています。

今後も帯広市の子どもたちの読書活動推進の一助となるように、各組織や各校の担当者との連携を深めながら、事業推進に努めていきます。

文責：帯広市学校公共図書館研究会事務局長（帯広市立川西中学校教頭）芹澤　拓哉

学校図書館情報

◆第50回中学生作文コンクール審査終了

各地区からの作品応募や審査協力をいただきましてありがとうございました。コンクールでは「未来を共に生きる」のテーマの下、家族、仲間、世界平和、互いの個性や違いを認め合う「多様性」など、未来を生きる上で大切にしていきたいことを力強く表現した作品が数多く寄せられました。

【表彰式の予定】
中央表彰式
札幌・道央地区表彰式：１月６日（金）13時開催
　　かでる2・7　大会議室
道北地区：１月７日（土）13時開催
　　旭川市国際会議場　大会議室
道南地区：１月10日（火）13時開催
　　函館市民会館　大会議室
日胆地区：１月11日（水）13時開催
　　室蘭プリンスホテル４階桃山の間
道東地区：１月13日（金）15時開催
　　道東経済センター
※各日30分前から受付開始予定

◆第55回北海道学校図書館研修講座へのご参加を

・1月５日（木）～７日（土）
北海道立道民活動センター（かでる２・７）
　５日（木）開講式・全体講演・選択講座
　　・指導者研修講座
　６日（金）選択講座・指導者研修講座
　７日（土）校種別選択講座（討議）・閉講式
・講　演：「民主主義社会と学校図書館」～「図書館の自由に関する宣言」と関連して
　　講師 元藤女子大学教授 渡邊 重夫　氏
・参加費：4,000円
・申　込：12月1日（水）～ 14日（土）の期間に
　　イベント申込サービスPeatixにて。

前回は講演や講座の動画配信で実施しましたが、今回は３年ぶりに対面での実施となります。詳細は要項（ＨＰにも掲載）をご覧ください。たくさんのご参加をお待ちしています。

◆第53回「学校図書館賞」にご応募を！

本賞は学校図書館に関する運動の部（学校図書館運動の推進）、論文の部（学校図書館に関する著作・論文）、実践の部（学校図書館の実践活動）の三部に分けて授賞されます。詳しくは全国ＳＬＡのＨＰをご覧ください。
応募期間2022年10月３日～ 2023年１月31日

◆「北海道の読書」の販売拡大の取組を

前号機関紙319号の発送に合わせて、読書感想文コンクール作品集「北海道の読書」の申込チラシをお送りしました。各学校で印刷をして各家庭に案内できるよう働きかけをお願いいたします。

事 務 局

事務局長　新　津　智　哉（札幌市立西陵中学校長）
事務局校　札幌市立西陵中学校
〒063-0835　札幌市西区発寒15条2丁目5-1
TEL 011-662-9323　FAX 011-661-3729

Amenity
B-Coat

本の破損や汚れを防ぎながら、抗菌効果を発揮するブックカバー「アメニティＢコート」ポリプロピレンフィルムのため、燃焼時にも塩素ガスなど有害物質が発生せず、安心です。ご指定の上ご愛用下さい。

キハラ株式会社

〒062-0035 札幌市豊平区西岡5条3丁目8-15
ＴＥＬ（011）857－3331
ＦＡＸ（011）857－5211

◆ 新刊紹介

『10代のうちに知っておきたい政治のこと』

越智敏夫（監修）
本作り空Sola（編集）
発売日2022年11月11日
ISBN 978-4-251-04505-8
あかね書房　4,180円（税込）

「政治」と聞いて、自分には関係ない、政治家がするものだと考える子どもは多いだろう。本書では、家庭や学校、クラブなどで起こる問題を解決するために、実はだれもが政治を行っていることから説明し、地域や国の政治へと話を広げていく。政治とはなにか、なにができて、なにが大切なのか、10代の子どもたちが選挙権を手にする前に知っておいてほしいことをしっかり網羅し、豊富なイラストとともにわかりやすく伝える一冊。

編 集 後 記

本号は第68回青少年読書感想文全道コンクールの特集号です。全道各地から届いたたくさんの感想文を読ませていただきました。本との出会いから得られた感動と自分の体験とを結ぶ素直な言葉たちに胸を打たれます。ご指導に当たれた皆様に敬意を表しますとともに、これからも多くの子どもたちが主体的に本を読み、心に沸き起こる感動を言葉で表現するという活動をさらに進めていただけるよう願っております。

表彰式では今年も受賞の子どもたちの晴れやかで誇らしげな姿を見られることを楽しみにしております。

（編集：村山　知成　野村　邦重
　　大久保　雅人　新津　智哉）

ホームページアドレス
http://sla.gr.jp/~hokkaido-sla/